

# 雲に関する空間認知とメタファー表現

—気象情報としての雲と心理—

Spatial Cognition and Metaphorical Expressions

Related with Clouds in the Sky:

Analyzing “Clouds” from Viewpoints of Meteorology and Metaphor

有光 奈美

## はじめに

空に浮かんでいる雲、空を覆う雲、雨を降らせる雲は、生活環境の中で日常的に目にするものの一つである。世界中のどこに行っても空があり、そこに雲が浮かんでいることがある。天と地という対比の間には雲の存在もあり、人間は空や雲や地面という対象が構成する環境世界を日常的に経験しながら生きてきた。雲は共時的にも通時的にも、個人的にも社会的にも馴染み深い対象である。雲には細分化された名称が存在し、学術的名称も文学的呼称も数多存在する。本論文では雲の代表的な気象的・物理的特性を踏まえ、特に日英語の単なる物理的描写ではなく比喩的描写や価値的・心的描写に注目する。雲は人間がどのように輪郭のない対象に線引きを行い、AとBを区別するかを示す好例である。「雲の下」、「雲の中」、「雲の上」という空間的視点を導入し、英語の“cloud”と日本語「雲」にまつわる表現の背景にある概念メタファーや方向づけのメタファーの存在を認知言語学の視点から指摘することを目的とする。言語間で雲の認識に相違点があることも指摘する。

## 1. 気象情報としての「雲」を認知言語学的視点で取り上げる意義

### 1.1 天地と雲の関係性

「天と地」という対比には「上下」の空間認知がはたらいっている。「雲」は人間を中心に考えると頭上にあることから空（天）の側に近いと見なされるが、常に「上」であると見なすかは興味深い点である。なぜなら、雲が持つ物理的特徴は（上空に浮かぶ、形を変える、捕まえられない、曇らせる、雨を降らせる、多様な色の雲がある等）多様で、「天と地」にはさまれる中間的存在とも見なせるからである。気象に関わる日本語表現の先行研究に松浦（2012）等を挙げられるが、英語の“cloud”は扱われていない。英語論文では Steen（1999）、Aisenman（1999）等があるが“cloud”のメタファー的多義を吟味してはいない。Kövesces（2005）は“cloud”をメタファーの視点から扱っているが日本語との比較ではない。本論文では Kövesces（2005）の視点を道具立てとして用いた上で、「雲の下」、「雲の中」、「雲の上」という空間的視点を導入する。このことにより Lakoff and Johnson（1980）が説いた方向づけのメタファーのうち GOOD IS UP; BAD IS DOWN の存在を日本語と英語の「雲」に関わるメタファー的表現からも裏付けられる。概念メタファーのうち GOOD IS CLEAR; BAD IS UNCLEAR 等の存在も裏付けられる。Kövesces（2005: 56）が主張する

SELF-CONTROL IS BEING ON THE GROUND というメタファーを「雲」と “cloud” に適用しつつ日本語と英語を対照的に扱い、相違点を明らかにする。

## 1.2 英語の “cloud(s)” と日本語の「雲」についての辞書による概観

英語の名詞としての “cloud” は、Longman Dictionary of Contemporary English (2008) [以下 LDOCE] では以下のように定義されている。

1. IN THE SKY [C, U] a white or grey mass in the sky that forms from very small drops of water: heavy /thick/ dense etc clouds

(1) *Dark clouds floated across the moon.*

(2) *Heavy clouds had gathered over the summit of Mont Blanc.*

Low/high cloud

(3) *Visibility was bad due to the low cloud* → storm cloud, thundercloud

まず、項目 1 はいわゆる気象上の「雲」のことを指している。

2. IN THE AIR [C] a mass of dust, smoke etc in the air, or a large number of insects flying together: cloud of dust/smoke/ gas etc

(1) *A cloud of steam rose into the air.*

(2) *Clouds of mosquitoes buzzing around us*

項目 2 は気象上の雲ではなく、空中に浮かんでいる「かたまり」を指している。

3. PROBLEM [C] something that makes you feel afraid, worried, unhappy etc:

(1) *the cloud of economic recession*

Cloud on the horizon (=something that might spoil a happy situation)

(1) *The only cloud on the horizon was her mother's illness.*

(2) *Fears of renewed terrorist attacks cast a cloud over the event (=spoil the happy situation)*

(3) *He returned to New York under a cloud of gloom and despair.*

項目 3 は心理描写に関わる内容で、それも「恐れ、心配、不幸」といった否定的感情を引き起こす「はっきりとしない何か」のことである。良いものを台無しにするような何かであり、気にかかる否定的内容を指す。この「はっきりとしない」という性質は自然界における雲の一つの特性で、手で触ったりして触知できる対象でないことが、こうした否定的心理的意味の基盤であると考えられる。意味基盤は後のセクションで Lakoff and Johnson (1980) を中心としたメタファー理論を用いて整理する。

4. under a cloud (of suspicion) (informal)

If someone is under a cloud, people have a bad opinion of them because they

think they have done something wrong:

(1) *He left the company under a cloud of suspicion.*

項目 4 も同様に否定的感情に関わる。項目 3 との違いは、「雲の下」という表現で「怪しい、疑わしい」という判断に関わる意味になる点である。

5. be on cloud nine (informal)

To be very happy about something

6. every cloud has a silver lining

Used to say that there is something good even a situation that seems very sad or difficult

7. be/live in cloud-cuckoo-land (BrE)

To think that a situation is much better than it really is, in a way that is slightly stupid → have your head in the clouds

項目 5 は本論文が注目したい肯定的評価の表現である。項目 6 は諺で、明暗にかかわるメタファーで説明できる。項目 7 は項目 5 との対比で興味深いが否定的評価である。このように「雲」にまつわる表現は一概に価値的に悪いとも良いとも言えない。複数の要素が基盤となり、意味を創出している。「曇らせる」という動詞は物理的対象を曇らせる（不透明にする）のか、心理を曇らせる（悪い状態にさせる）のか違いはあるが、心理描写に肯定的評価は見当たらない。形容詞“cloudy”も名詞の中心的意味から離れず、肯定的評価は見当たらない。さらに、“haze”（かすみ・もや）にも“cloud”に通じる心理描写の類似用例があるが“cloud”ほどの幅広い用例はなく、雲の方が人間にとってより基本的で身近な気象情報として認知されていることがわかる。日本語の「雲」は広辞苑（第 6 版）では以下のように定義されている。

くも【雲】（「籠もる」と同語源か）

- 1) 空気中の水分が凝結して微細な水滴または氷晶の群れとなり、高く空に浮いているもの。万「三輪山をしかも隠すか―だにも情こころあらなも隠さふべしや」
- 2) 雲のように一面になびいて見えるもの「花の―」
- 3) 極めて遠い場所、高い場所。また高い階級。「―の上」
- 4) 行動・所在が確かでない物事のたとえ。「―をつかむような話」
- 5) 心の晴れないことにたとえていう。新後選釈教「暗き夜の迷ひの―の晴れぬれば」
- 6) 火葬の煙をたとえていう。新古今哀傷「あはれ君いかなる野辺の煙にて空しき空の―となりけむ」
- 7) 紋所の名。浮雲をかたどったもの。

本論文は名詞に注目し、物理的意味、価値的意味に分類し、「雲」と“cloud”の価値的意味に *e-<sub>pos</sub>*, *e-<sub>neg</sub>* の両方が存在することを指摘する。ここでの *e-<sub>pos</sub>*, *e-<sub>neg</sub>* とは「価値評価的に良い・悪い」という意味で、Horn (2005: 332-333) も用いている

Cruse (1980) の定義である。Kövesces (2005) も踏まえ意味基盤の同定を目指す。

## 2. メタファー理論の概観と雲の物理的分類

### 2.1 メタファー理論の概観

メタファーは単なるレトリックの問題ではなく言語や認識の問題であり、日常言語使用に浸透しており人間の認識の仕方や行動にも現われると主張したのは Lakoff and Johnson (1985) である。メタファーとは私たちの考え方、モノの見方、生き方そのものであるという主張は、従来の研究に新しいメタファー観を与えた。また、各メタファーは首尾一貫した体系的を持つことも事例を挙げて明らかにした。本論文は彼らの主張を用いて「雲」の物理的性質が言語にどのように反映されているかについて、メタファーの体系的性質を踏まえながら論じる。

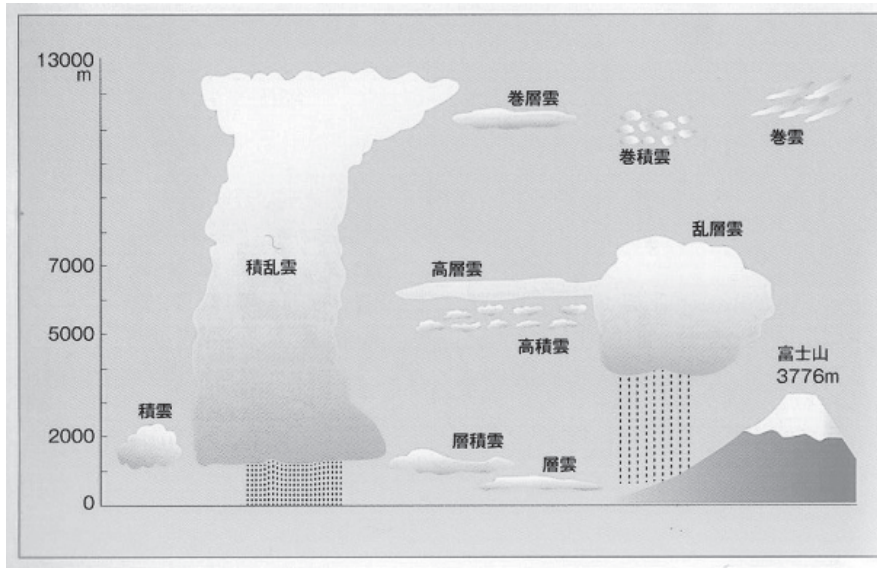
### 2.2 雲の名称に関する物理的分類

天気予報では「快晴」「晴れのち曇り」「晴れときどき雨」という分類を聞くが、素人感覚では何と呼ぶべきか即答できない曖昧な天気もある。雲量の観測では特に空に浮かぶ雲の状態や雲量を元に4分類し、雲量(空全体のうちどれくらい雲が覆っているかの割合)に応じて、雲量1以下の場合が快晴、雲量2~8が晴れ、雲量9以上の時は空を覆う雲の種類によって、薄曇、曇の2つに分けられる(筆保 2014: 18) とされる。塚本 (2005: 2-3) には「雲と霧はどちらもあたたかくて湿った空気が持ち上げられたり冷やされたりした時に余った水蒸気が水の粒になってできるという点で共通しており、地面に着いている時は霧、高い空に現れた時は雲」とある。うろこ雲、入道雲のような俗称もあれば、世界気象機関(WMO)の分類もある。現在、雲はその形と高度によって10種類に分けられる。巻雲、巻積雲、巻層雲、高積雲、高層雲、乱層雲、層雲、層積雲、積雲、積乱雲である。本論文で注目する cloud nine という表現が指す「積乱雲」は「種(雲を見た目の形で分類したもの): 無毛雲、多毛雲」とも「雲の部分的な特徴、付随してできた雲の名称: 頭巾雲、ベール雲、尾流雲、アーチ雲、ちぎれ雲、漏斗雲、降水雲、乳房雲、かなとこ雲」とも分類され、俗称では雷雲、たち雲、雲の峰、英語では Cumulonimbus (Cm) と言われる。村井・鶴山 (2011: 11) は十種雲形の判別基準を挙げ、積乱雲は「かたまり状で、雲底が低く、背が高く、雲底が濃灰で、降水と雷があるもの」とする。「かたまり状」「高い」等の要素が cloud nine の意味基盤である。村山 (2007) に以下の説明がある。

昔から「雲に乘りたい」などといいますが、雲は非常に小さな氷や水滴からできており、その大きさは平均で、0.0一ミリ程度です。この小さな雲の粒がくっついて大きくなったのが雨粒で、小さなものは二ミリ、平均で一ミリくらいです。実際に雲に乗ることができるとしたら微生物くらいなものでしょう。(村山 2007: 119-120)

実際に雲の上に立ったり乗ったりすることは物理的に不可能だと理解しているのに、雲を(とりわけ白い雲を)クッションや綿等に見立て、あたたかもくもくと上空に膨らんだふわふわした快適な場所であるとイメージすることが言語表現に反映さ

れている。武田 (2014: 26-27) は以下のように 10 種類の高さを図示している。



積乱雲は十種雲形の中でも高い位置にあり、下から膨らむボリュームのある雲である。綿菓子のような形で垂直に上に向かって発達する。雲の上部は強い風で水平に流されて平らになる形から「かなとこ雲」の俗称もあるが、かなとこ（鍛冶や金属加工を行う際に用いる作業台のこと）が何であるか即答できる人は多くないだろう。一方、俗称の存続はこうした雲の形状自体が「かなとこ」そのものが身の回りで見られなくなってもなお存在することを裏付けている。新田 (2002: 24) は「この雲の底（雲底）は、たいへんくらく、その下にちぎれた低い雲があります」と説き、積乱雲が単に真っ白ではないと指摘している。雲の色は雲に関わる表現の意味理解に影響を与えていることから、雲が人間にとって白以外の色にも見えることは重要な事実である。

### 3. 空に浮かぶ“cloud”と「雲」の物理的意味と比喩的意味

#### 3.1 「雲」と“cloud”に対するメタファーによる分析

雲の意味理解には「曇るとは悪いことだ」「曇るとは理解がしづらいことだ」という概念メタファーと、「雲の下、雲の中、雲の上」という方向付けのメタファーの両方が必要である。これらが合わさって日常言語における雲の意味を形成していると考えられる。Lakoff and Johnson (1985: 56-57) に、以下のような指摘がある。

The centrality of up-down orientation in our motor programs and everyday functioning might make one think that there could be no alternative to this orientational concept. Objectively speaking, however, there are many possible frameworks for spatial orientation, including Cartesian coordinates, that don't in themselves have up-down orientation. Human spatial concepts, however, include UP-DOWN, FRONT-BACK, IN-OUT, NEAR-FAR, etc. It is these that are relevant to our continual everyday bodily functioning, and this gives them priority over



other possible structurings of space --- for us. In other words, the structure of our spatial concepts emerges from our constant spatial experience, that is, our interaction with the physical environment. Concepts that emerge in this way are concepts that we live by in the most fundamental way.

Lakoff and Johnson (1985) の邦題は「レトリックと人生」であるが、原題 *Metaphors We Live By* を直訳しつつ補えば「私たち人間がそれらを用いて生活して生きているところのメタファーたち」という意味合いである。上の引用部分に“concepts that we live by” という表現があり、筆者たちの強い主張がわかる。方向づけのメタファーは絶対的で客観的なものではなく、日常生活での経験の繰り返しを通じて立ち現われる。このことは雲・cloud の理解に重要な点で、そもそも「上」とは相対的なのである。村井 (2013) は雲のできる場所と大気構造を説明している。

地球の大気の端 (大気圏) は、地表からおよそ 800km の高さまでとされています。[...] 大気圏は、温度の変化の様子によって、下層から「対流圏」「成層圏」「中間圏」「熱圏」と大きく 4 つの層に分けられており、雲や雨・雷・虹など、私たちに身近な気象現象は、全て地表面から 15000m までの大気最下層の「対流圏」で起きている現象です。ここでは大気の対流活動が盛んであり、それにより雲が発生し、同時に雨・雪・雷・竜巻などのいろいろな気象現象が起きているのです。[...] 私たちが乗る飛行機 (旅客機) は通常 10000m~12000m くらいの高さを飛行しています。これは巻雲の高さとはほぼ同じです。[...] だから、飛行機に乗ると巻雲以外のほとんどの雲を下方に見て、雲の雲頂部を観察できるわけです。(村井 2013: 6-8)

一般に「頭上に雲がある」と言うが、具体的にどれくらいの数値で上にあるか日常生活では気に留めていない。また、常に頭上かということ、人間が雲より上にいる状況も稀には想定可能であり、その一つが飛行機に乗っている時間である。また、地球の水循環という重要な役割を担うものの一つが雲で、雲は必ずしも否定的価値の対象ではない。太陽からのエネルギーで海水を水蒸気に変え、水蒸気となった水が空で雲になり、雲から雨が降り、雨が川から海に流れ、再び太陽エネルギーで蒸発した海洋が水蒸気になって空に上り、地球の生命に不可欠な水循環の媒介の役割を果たす。

雲の色については、雲の粒に太陽の光が当たって散乱するために雲が白っぽく見え、特に太陽の光が多く当たると雲はより白く見えるが、雲が分厚くて太陽の光が当たらないところは陰になるため、黒っぽく見える (岩槻 2005: 13) ののである。筆保 (2014: 12) は、白黒以外の色の理由も説いている。雲を形作る粒の大きさは 0.1~0.01mm で光の波長よりも大きめで、この大きな粒が引き起こす散乱をミー散乱 (電磁波の波長と、それを散乱させる粒子の半径が同じくらいである時の散乱) と言う。ミー散乱では全ての波長の光を同じように散乱させる特徴があるため、全ての波長の光が混ざりあい、散乱光と太陽光と同じ白色になる。この白色の散乱光によって、雲は白く見える。分厚い雲では灰色に見えることがあるのは、雲が太陽光をさえぎり、光が減衰するためである。朝焼けや夕焼けが赤っぽく見えるのは、空気分子によるレイリー散

乱（電磁波の波長が粒子（気体分子）の半径より非常に大きい場合の散乱）によって説明でき、朝や夕方は太陽の光が斜めから差し込む。すると、昼間よりも光が空気の層を通過する距離が長くなる。レイリー散乱では波長の短い光ほど強く散乱されるため、青色系の光の多くが手前の方で減衰する。減衰せずに残った赤色系の光が私たちの目に届くため、朝や夕方の空は赤っぽく見える。夕焼けは朝焼けよりも鮮やかになる傾向があるが、これは夕方の空は大気が汚れていて、水蒸気やちり等の粒が多く浮かんでいるのが原因である。これらの粒がレイリー散乱の効果を強める為、赤色が濃くなる。森田（2009: 50）は太陽の光にはいろいろな色が含まれており、色は光の波長が異なると説明する。目で見える可視光線の中で、短い順に、紫、藍、青、緑、黄色、橙、赤で、赤が一番長い。太陽光が大気中の空気分子にぶつかってレイリー散乱が起こると、波長の長い赤はあまり散乱されずに通り、波長の短い青系統の色は多く散乱される。そのため青系統の光が目へ飛び込んできて空は青く見える。もっとも、目があまり紫を感じないようにしているため紫の空だとは感じない。

### 3.2 メタファーから見た雲の意味にかかわる特殊性と普遍性

Kövesces (2005) は Lakoff and Johnson のメタファー観を発展させている。（下線部は筆者による）この特殊性と普遍性という視点は、雲という世界中どこでも存在している対象を理解し、意味理解のメカニズムを知るために重要な手がかりである。

How universal might this English system for the self be? Is not the system a peculiarity of the Western mind? If we look at some linguistic examples, one can easily be led to believe that what we have here is a unique – a Western – metaphor system of inner life. Linguistic examples such as hanging out with oneself, *being out of lunch*, *being on cloud nine*, and *pampering oneself* might suggest that the conceptual metaphors that underline these examples are culture-specific conceptual metaphors. But they are not. As it turns out, the same conceptual metaphors show up in cultures in which one would not expect them. Lakoff and Johnson report that the system can be found in Japanese. Moreover, many of the examples translated readily in Hungarian, and that indicates that the system is not alien to speakers of Hungarian either. (Kövesces, 2005: 59)

Kövesces はこうした概念メタファーについて必ずしも文化限定的なものではないとしている。また、「雲」にかかわるメタファーとして、**SELF-CONTROL IS BEING ON THE GROUND** を以下の文脈の中で挙げている。（下線部は筆者による）

The notion of the self's being in its normal location" has several distinct versions: (1) the self as container has the subject in it; (2) the self is on the ground; and (3) the self is a whole.

#### THE SELF AS CONTAINER

(I was *beside* myself. He's *out to lunch*. Are you *out of* your mind?)

## SELF-CONTROL IS BEING ON THE GROUND

(He's got *his feet* on the ground. The *ground fell* out from under me. I'm on cloud nine. Her smile sent me *soaring*.)

## ATTENTIONAL SELF-CONTROL IS HAVING THE SELF TOGETHER

(*Pull yourself together*. She hasn't *got it together*.)

TAKING AN OBJECTIVE STANDPOINT IS LOOKING AT THE SELF FROM OUTSIDE (You need to *step outside* yourself. You should *take a good look at* yourself.)

The metaphor TAKING AN OBJECTIVE STANDPOINT IS LOOKING AT THE SELF FROM OUTSIDE is a special version of the TAKING AN OBJECTIVE STANDPOINT IS LOOKING AT THE SELF FROM ATTENTIONAL SELF metaphor. Lakoff and Johnson call it the objective standpoint metaphor, as it reveals a view of the self to itself “from outside.” (*ibid.*: 2005, 55-56)

つまり、I'm on cloud nine. というメタファー的表現は、Kövesces によれば SELF-CONTROL IS BEING ON THE GROUND に類する。Kövesces (2005, 80) は、In languages that are based on this pattern words such as sky/cloud mean UP と述べ、「空・雲は上」という認識の普遍性も示唆している。悲しみが下方向で、落ち込む気持ちが明暗における暗さと結びつくことも指摘している。

## &lt;下方向&gt;

The concept of sadness is a key concept in psychotherapy because of its “close relative” in clinical and analytic practice- depression. Metaphors for sadness were identified by George Lakoff and Mark Johnson (1980) and Antonio Barcelona (1986). These include SAD IS DARK, SAD IS HEAVY, and SAD IS DOWN. Given these conventional metaphors for sadness, we can ask whether all of them are equally common and important in therapeutic discourse, or whether one or some of them stand out in importance. (*ibid.*: 2005, 101)

## &lt;暗さ&gt;

This issue was taken up by Linda MacMullen and John Conway (2002), who studied interviews with 21 patients who were precisely diagnosed as having depression. On the basis of their study, they found four conceptual metaphors for depression: DEPRESSION IS DARKNESS (“It's really like a *black cloud*.”), DEPRESSION IS WEIGHT (“I felt just so – so *heavy*”), and DEPRESSION IS DESCENT (“I just was *down*”). As we can see three of these overlap with the conventional metaphorical source domains for sadness identified by Lakoff, Johnson and Barcelona... (*ibid.*)

気象学的に雲は複数の特性を持ち、またそれが認知主体である人間のモノの見方と結びつくことから、意味理解も多義になる。雲の下なら *e-neg*、雲の中なら明瞭



に見えないことから理解ができないことに通じて *e-neg*、雲の上なら価値的に高いことから *e-pos* なのである。したがって、*He is usually in the clouds.* であれば、雲の中にいるので知性が明瞭でなく夢にふけているという否定的価値、*on a cloud* であれば幸福感という肯定的意味になる。類型的視点は後のセクションで扱うが、普遍性を裏付ける一例としてポルトガル語でも、*com a minha cabeça nas nuvens (with my head in the clouds)* のように頭が雲の中に入っていれば役に立たない夢にふけているという否定的価値で、*estar nas nuvens (be on the clouds)* であれば雲の上で、幸福感という肯定的価値の意味を持つ。

## 4. 「雲」あるいは“cloud”が肯定的意味を持つとき

### 4.1 “cloud”の語源と *on cloud nine* の肯定的意味基盤

語源辞典（寺澤 1997）を用いて、“cloud”の語源的背景を概観する。

<名詞>

1. OE 岩山
2. c1280 雲
3. ?a1300 曇り、かげり
4. c1384 雲状のもの
5. c1384 大群

<動詞>

1. a1420 暗くなる、曇る
2. 1513 曖昧にする
3. 1583 雲で覆う
4. 1590-91 (顔などを) 曇らせる
5. 1610-11 (名声・評判などを) 汚す

上記から“cloud”とは元は「岩山」のようなはっきりとした手で触ることのできる物体を指していたものが、手で触れない物体を指すようになり、さらにはそれに似たものを指すようになったことがわかる。小島 (2004) によれば、“cloud”とは雲を指す他に「形が雲に似たものを言い、一面を覆う煙 [ほこり、蒸気]、一団になって空を移動する鳥やいなごなどの大群、転じて大勢の人々、集団。また雲が光を遮り暗くする性質を持つことから、暗くするもの、不明確にするもの、透明のものを曇らせるもの、しみ、傷、比喩的に [文] 顔に表れる心の曇り、不安、懸念、時代を覆う暗雲。動詞であれば、雲で覆う、曇らせる、視界を曇らせる、ぼやかす、心、顔を曇らせる、不安にさせる、思考などを曇らせる」と説明されており、語源は「古英語 *clūd* (=mass of rock; hill) から。雲の重なり合っている形が岩山に似ていることから中英語で雲の意味が生じ、現在の意味に展開した」であり、*clod* (土の塊) と同語源とのことである。古英語 *clūd* は丸いかたまり、岩のかたまり、丘を指していたとのことで、形状の類似性が空に浮かぶ雲を指すようになり、一方で「土の～」の意味を失っていったことがわかる。「有頂天」という肯定的価値の意味を持つ *on cloud nine* という表現に注目すると、小島 (2004) は意味理解の背景として「以前は *on cloud seven* といった。ユダヤ教で第7の天国は神のいる最高の天国とされていたことに由来すると思われる」と説明している。「第7天国」は、フランス語 (*être au 7ème ciel*) や、ロシア語 (*на седьмом небе от счастья*) にも見られる表現である。また、「アルク英辞郎」(Ver.146 <http://www.alc.co.jp/>) では「《1》ダンテの『神聖喜劇』(The Divine Comedy) の中では the ninth heaven が神に一番近く、いちばん幸福であるとされた。《2》米国の気象庁で用いられた雲の種類9区分から。《3》cloud nine とは積乱雲のことで、非常に高くまで上昇することから。」と説明している。*living in cloud cuckoo land* は、「夢想、理想の国。古代アテネの喜劇作家アリストファネスの『鳥』(The Birds)』に登場する雲の間に作られた完全な都市 Cloud-cuckoo-land から」と「英辞郎」では説明されている。*cloud cuckoo land* とは「夢想の国」のことで、それが「実行不可能なばかげた計画」をも指すのは意味が一周して皮肉になっていると考えられる。竹林 (2002) は「(口語) とてもうれ

しい気持ち、on～ とともうれしくて、心浮き浮きして；(麻薬で) 夢見心地になって。雲を10段階に分けた場合、9は積乱雲 (cumulonimbus) にあたる」と説いている。語源と合わせて雲の分類の歴史をたどると、森田 (2009: 6) には、紀元前8世紀に既に雲は「湿った空気できている」と解釈されていたが科学的とはいえない研究が進み、18世紀の科学者の多くは「雲ものもととなる水蒸気は中身が空っぽの球なので雲は浮かんでいる」と信じ、水蒸気が気体であると確かめられたのは19世紀初頭、雲の種類に名前をつけて分類する方法が生み出された旨が書かれている。岩槻 (2008: 191) には、イギリスのハワードが雲の形による分類を試み、巻雲 (繊維状、糸状のもの)、積雲 (もくもくとした形の雲)、層雲 (層のようにべたっと横に広がる雲) の3つを基本形と決め、基本形を元に雲を7種類程度に分けた後、イギリスの気象学者アバークロンビーが世界をめぐり、世界中の雲が同じ分類法で分類できることを実測でつきとめ、それを基に研究が進み、1896年にWMPから世界初の国際雲図帳 (雲分類の指針) が出版され、現在改訂が進んでいるとある。プレイター=ピニー (2006, 邦訳2007: 45-53) にはcloud nineのエピソードがより明確に書かれている。

発達した積乱雲は、世界最高峰のチョモランマよりもはるかに高くなることもある。最大級のものは [...] 地上600mの雲底から盛り上がり、1万8000 mもの高さに達する。これほど巨大な積乱雲の内部エネルギーは、広島に落とされた原爆の10倍にも相当する。[...] このような破壊的なパワーを持ちながら、積乱雲が「クラウド・ナイン (夢見ごっこ)」という陽気な慣用語の由来の雲だとはびっくり仰天だろう。語源を知るには1896年を振り返らなくてはならない。[...] 国際雲年は、スウェーデンのウプサラ大学気象研究所のH・ヒルデブランド=ヒルデブランドソンと、イギリスの王立気象学会のラリフ・アバークロンビーが総説した気象学者の国際組織によって定められた。[...] 雲用語は、それよりほぼ100年前にイギリスのアマチュア気象学者でクエーカー教徒のルーク・ハワードによって基礎となる者が作られていた。[...] ハワード以前には雲を分類して名前をつけようとした者はいなかったのだ。[...] 統一された用語が必要だ。二人は雲委員会のたすけを得て、パリで開かれた国際気象会議で1896年を国際雲年とすることを高らかに発表すると同時に、図入りの雲辞典を出版した。三か国語で発行されたこの本は「国際雲図帳」と言い、委員会の定めた10種類雲形を数多くの写真を用いて解説したものだ。その10種の雲形のうち、9番目が最も高く発達する積乱雲だった。天にも昇る気分を「クラウド・ナイン」というのは、最高の高みにいるということなのだ。[...] 残念なことに、第2版から10種雲形の順序が変わり、積乱雲は10番目になってしまった。しかし「クラウド・ナイン」という言葉は今も残っているようだ。日常会話で使われるようになったのは、保険調査員を主人公にした1950年代のアメリカの人気ラジオドラマ『ジョニー・ダラー』のおかげだろう。主人公の探偵は殺られて朦朧とするたびにハイになる。そのあと1969年の夏には、ソウルの王者テンプレートションズの「クラウド・ナイン」が大西洋の両岸でヒットした。

山田 (2006) は「積乱雲」を以下のように説明している。「強い上昇気流のために雄大積雲がさらに発達すると、巨大な山形や塔状の積乱雲になる。その雲底は2,000mほどで雲頂は10,000以上、圏界面にまで達することがある。それから上は逆に温度が高くなるうえに空気の密度も小さいため、上昇する力を失ってそれ以上の上昇は妨げられて、水平に広

がり、かなとこ雲や羽毛状の雲に形を変える。積乱雲の上層部はほとんどが氷晶からなり、中層部は過冷却雲粒と雪、下層部は雪が溶けて雨滴になっている。強い上昇気流のため、下層の雨滴は上昇して凍結し、上昇気流の弱いところから落下して溶解し雨滴となるが、また上昇して凍結する。[...] 電光や落雷、突風、強いしゅう雨を伴って荒れ狂うが、その寿命は30分から1時間くらいが多く、積乱雲が同じ場所を次々に通過すると集中豪雨になることもある (*ibid.*: 2006: 62)。雄大積雲とは成長する大きな積雲のこと、圏界面とは対流圏と成層圏との境界線のことであり、この圏界面より高くは雲が成長できないため、雲頂は横に大きく広がる (武田 2014: 46-47)。積雲から積乱雲になると雷の音が聞こえ、にわか雨が降ってくる (武田 2011: 14-17, 20-21, 112)。もくもくと綿菓子のように膨らんでいる積乱雲だが、その詩情あふれるのどかな外見とはうらはらに雲の内部では激しい水滴の動きがあることがわかる。パイロットにとって積乱雲があれば、それを避けて進んでいくことになる。また、積乱雲は白いばかりでなく灰色や黒く見えることもあり、電光や落雷、突風、強いしゅう雨、竜巻、ひょうを伴って地上を襲う。このように気象学的に見れば、恐ろしいゲリラ豪雨を引き起こしたり、甚大な被害を与えたりする否定的価値評価を持つ積乱雲であるにもかかわらず、*on a cloud nine* という英語表現における雲は積乱雲を指すとされる。この意味理解においては積乱雲の具体的な物理的働きや恐ろしさには焦点が当てられておらず、それよりも見た目の特徴が優先されていると考えられる。

雲の重さは浮かんでいる雲粒子の重さの合計で計算され、夏の積乱雲は大きいものでは100万トンにもなる (岩槻 2005: 9) ことから、物理的には身軽とは言えない。しかし、「浮雲」「雲のように気楽な」等の表現ではイメージとしての軽さに焦点が当てられている。それだけ重いのに空から落ちてこないのは各雲粒子が大変小さく風に流されて浮かんでいるからであるが、言語表現では積乱雲の物理的重さではなく見た目の特徴が優先されている。

## 4.2 雲の名称に関する文学的分類

「雲」は必ずしも価値的に悪い対象ではない。戸谷 (1960: 127-144) は万葉の「雲」を中心に古代文学における景物について論じている。日本語には文学的呼称も存在し、趣のある対象としても捉えられている。森田 (2009: 36-37) では以下の名称の紹介がある。

- |                                      |                 |
|--------------------------------------|-----------------|
| (1) a. 卷雲：すじ雲、はね雲、しらす雲               | e. 高層雲：おぼろ雲     |
| b. 卷積雲：うろこ雲、いわし雲、さば雲など               | f. 乱層雲：雨雲       |
| c. 卷層雲：うす雲                           | g. 層積雲：くもり雲、うね雲 |
| d. 高積雲：ひつじ雲、むら雲、まだら雲、かわらけ雲、だんだら雲、石垣雲 | h. 層雲：きり雲       |
|                                      | i. 積雲：わた雲、入道雲   |
|                                      | j. 積乱雲：入道雲、雷雲   |

いわし、さば等の魚の名前が多いのは、かつて漁師たちが空の様子を見て天気予報をしたもの、ひつじ雲は英語の SHEEP CLOUD が日本語に定着、かわらけは河原の石の意味で、角が取れた丸い石を敷き詰められている河原をイメージ、と森田は説いている。入道雲は大男が立ちほだかる様子と似ていることからつけられ、地方によっては「○○太郎 (次郎・三郎)」とも呼ばれ、北関東の坂東太郎、京都の丹波太郎等の例を森田が挙げている。

雲は古来より和歌の中でもロマンチックな対象として用いられてきた。日本語では他にも「花曇り」「若葉曇」「梅雨曇」「暁雲」「夕焼雲」「祥雲」等の表現もあり、必ずしも悪くない情景を描写したり、むしろ風情を感じさせたりするものとして捉えている雲が存在する。同時に「妖雲」「愁雲」等肯定的と言いつれない価値的表現もあり、肯定的・否定的表現がどちらも存在することから人間の心情を投影しやすい対象であることがわかる。

司馬遼太郎の小説「坂上の雲」のあとがきには「のぼってゆく坂上の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいているとすれば、そのみ見つめて坂をのぼってゆくであろう」とあるが、この時の雲は白く、高い位置にあり、明治の人たちが目指した対象であり、肯定的価値のものとして描かれていることは明らかである。また、極楽と地獄という対比を持つ死後への世界観は平安時代の僧である源信の「往生要集」に説かれている。極楽とは西にある阿彌陀仏の浄土世界であるのに対して、六道（天・人間・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄）が存在する。地獄は八大地獄に分類され、等活地獄、黒縄地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄があり、生前の罪が増えるほど下の地獄（ありとあらゆる苦が集結する阿鼻地獄の方向）に落ちるとされる。日常言語で入浴中に「極楽極楽」とつぶやくような時の「極楽」には実際の意味での死後の死生観が捨象されているが、極楽と地獄に物理的空間認知の上下をあてはめて捉えることは珍しくない。

さらに、「雲に汁」のように雲が雨を催すことを指す表現は「そのように形勢が変わってきて、事柄が好転してくること」（広辞苑 第六版）ことも意味し、こうした用例が存在していることから、雲や雨を必ずしも否定的なものとして捉えていないことがわかる。

### 4.3 諸外国語における雲に関する表現の多様性

雲は世界中に存在している対象であることから、諸言語で単なる物理的状況描写ではない比喩的拡張をした表現が存在することが予想される。例えば、「空に雲が浮かんでいる」という地球上で普遍的に生じる物理的状況描写は日本語、英語、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、アラビア語でも存在する。一方、将来的見通し、量的表現、知的状況、心理的状態といった意味分類から相違点も見える（いくつかの比較事例は本論文最終頁の別表参照）。日本語にない用例で、英語で「大量の」という意味に注目すると、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、アラビア語で（対象となるモノや生き物は多少異なるものの）類似表現がある。しかし、アラビア語では *سحابة من الغيل* で「もうもうたる砂ほこり」のように量的に描写しても、人や昆虫を表わす量的表現に雲を用いないといった違いがある。また、フランス語で *Je t'envoie un nuage de bisous* は字義通りには「キスの雲」だが、いくつかの軽いキスの意である。また *un nuage de lait* (a drop of milk 牛乳) で「ちょっとした量の～」も表わし (<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/>)、これらは日英語に対応する慣習的な直訳表現はない。もっともコーヒーと牛乳という組み合わせはデフォルトとしてコーヒーが基盤で牛乳は添え物で量的に少ないという一般的解釈の自然な理解の方向性がある。典型的特徴から普遍性を導くのは容易でないが、「雲がある：将来的見通しが悪い、疑いをかける、量的に多い」「(認知主体が) 雲の下：気分が塞いでいる」「雲の中：知的に判断できていない」「雲の上：幸福感」と分類できる。ポルトガル語は *há nuvens no pensamento* (考えに雲がある) なら「はっきり考えられていない」という否定的意味で、明暗と知的理解に関わる普遍性の存在が伺える。色も意味に重要な役割を果たす。ポルトガル語では *nas nuvens com o côr de rosa* (バラ色の雲の上にいる) のように上下の空間認知だけでなく色でも意味合いが変化し、バラ色なら価値的に良く、黒色なら *esteve*



sob uma nuvem negra (黒い雲の下にいる) のように価値的に悪い。日本語でも類似の理解が可能である。「雲の上にいる」で、ポルトガル語もアラビア語も英語同様に喜びを表せる。日本語は「雲上人」や「雲の上の人」は位の高さを指せるが(アラビア語も同様に社会的な高位を描写可能)、on a cloud や on a cloud nine の日本語直訳は「ウキウキして、この上なく楽しい、有頂天で」という意味にならない。ロシア語も直訳の「雲の上にいる Он в облаке.」は心理的な有頂天の意味にはならない。フランス語は英語の直訳に近いが、sur un petit nuage のように petit (小さな) を加え、その心理状態が短期間である見込みを仄めかす。明るさも重要な意味を持つ。英語は every cloud has a silver lining という表現があり、every sad or unpleasant situation has a positive side to it. [CEDAL3] を意味する。ここでは gold vs. silver の対比ではなく、光るもの (silver) と暗いもの (雲が隠すもの) という対比がある。いくつかの表現に関わる諸言語比較は本論文の最後にある「表 1: 雲の関連表現と諸言語比較」を参照されたい。

シェイクスピアの「リチャード3世」第1幕第1場ではグロスター公リチャードが独り登場し、以下のように述べる。(William Shakespeare, *King Richard III*, 小田島雄志 [訳] 1983, 『リチャード三世』、シェイクスピア全集、白水Uブックス)

Now is the winter of our discontent われらをおおっていた不満の冬もようやく去り、  
 Made glorious summer by this son of York, ヨーク家の太陽エドワードによって栄光の夏が来た。  
 And all the clouds that loured upon our house わが一族の上に不機嫌な顔を見せていた暗雲も  
 In the deep bosom of the ocean buried. いまは大海の底深く飲みこまれたか影さえない。

この「clouds/ 暗雲」は否定的意味で、「不満の冬」や「栄光の夏」と並べて王位の復権を語っている。ただし、上記は英語の例である。たとえばアラビア語の「あなたに寒さと平安がありますように」という挨拶の存在が示唆するように、涼しさや寒さが必ずしも悪い対象として捉えられず、雨が降ると嬉しく、日中が人間にとって暑すぎて活動しづらいような場所もある。たとえばエジプトのように「良い天気」が指すのは「太陽が照っている天気」ではなく「曇っているくらい天気」という文脈、文化、環境も地球上には考えられる。

#### 4.4 日常生活における雲の見立て

天気関連のことわざは多くあり、「飛行機雲ができる」と雨が近い」であれば、飛行機雲ができるときは上空に水蒸気があって湿っているため、じきに雨が降ることを指す。古今東西で地理的歴史的に、農業での豊作不作や戦争での勝敗等、人間にとって気象情報は身近で重要な役割を担ってきた。2017年卓上カレンダー (MON series Calendar, 株式会社クローズ・ピン) の6月には「雨の日だって太陽はのぼっている 晴れたら明るい光がふりそそぐよ」とある。商品ホームページには「日々 生活している中で、楽しいコト、苦しいコト たくさんあります。[...] たくさんの人にあなたにかいキモチになってもらえますように・・・もん」と綴られている。メッセージに擬人化された太陽や傘のイラストが添えられ、「雨の日」、「太陽」、「のぼる」、「晴れ」、「明るい光」、「ふりそそぐ」という言葉が字義通り (literal) な意味ではなく比喩的 (non-literal) な意味で用いている。字義通りの気象情報では作者の意図を汲んでいないだろう。気象関連表現が心理描写になっている。「雨の日」はつらいこと、「太陽」「のぼる」「晴れ」「明るい光」は良い見込みや前向きな気持ちと結びつく。「ふりそそぐ」は液体の見立てだが、光の明るさ (光の多寡)



の物理的対象の移動ではなく、上から下へ良いモノが与えられる心理的対象の移動を表わす。「雨の日だって太陽はのぼっている」という前半部分の文脈が読者に気づきを与え、言われてみれば確かにそうだという新しいモノの見方を提案している。梅雨の気象表現が転じて心理的対象に適用可能という解釈につながる面白味がある。一般に「毎日の生活を励ますメッセージ」との解釈が妥当だが、こうしたメッセージを字義通りの意味で解釈する環境の方が身近な人（たとえば日常的に上空にいるパイロット等）もいるだろう。前半の「雨の日だって太陽はのぼっている」の部分を珍しく感じず、当たり前物理的な気象上の指摘と感じる読み手もいるだろう。これは Lakoff and Johnson (1985) で指摘された特定環境条件での認知主体が意味の解釈を決めるという事例に当てはまる。

Thus UP is not understood purely in its own terms but emerges from the collection of constantly performed motor functions having to do with our erect position relative to the gravitational field we live in. Imagine a spherical being living outside any gravitational field, with no knowledge or imagination of any other kind of experience. What could UP possible mean to such a being? The answer to this question would depend, not lonely on the physiology of this spherical being, but also on its culture. (*ibid*: 57)

Lakoff and Johnson が「直接的な物理的経験」と呼ぶものは単なる体つき（活動時に頭が上にあり、歩く時には足が下にあり、顔が進行方向（前）についており、背中では顔とは逆の側にあり、休息時には横たわるといった特徴的な体つき）を人間が持つことだけでなく、あらゆる経験が広大な文化的前提という背景の中で行われることを指している。人間は一般的な状況では地上で暮らし、重力に支配されており、空と地に挟まれた上下の空間認知は「雲」を頭上にあるものと習慣的に捉えている。しかし、仮にパイロットや国際的なビジネスパーソンであれば、地上でほとんどの時間を過ごしている人と比べれば、飛行機に乗る機会がはるかに頻繁であり、天と地における上下の認識の中で物理的に雲をもっと身近で見る時間が多くあるだろう。以下は、ルフトハンザ航空の広告である。

(2) 雲の上のルフトロッパー あなたの日常をルフトハンザが特別な時間に。ルフトロッパーを思わせる落ち着いた雰囲気、ゆったりとしたくつろぎの空間でお迎えます。雲の上の眺めを楽しみながら、レストランのようなコーススタイルでお出しする魅力的なお料理を。もちろん高速 WiFi と多彩なエンターテイメントが楽しめる広々としたオフィスにも。仕事も、リフレッシュも、エンターテイメントもそして上質な睡眠も。すべてはあなたの思うままに。(http://www.lufthansa.com/jp/ja/new-menu2017)

これは飛行機の中であたかも高層ビルのルフトロッパーで楽しんでいるかのような時間・空間・サービスが提供されるということで、字義通りの「屋根、屋根の上面」という意味ではない。飛行機から雲の上の眺めが見えることもあるだろうが、見えない時間もある。また、パイロットであつたり窓側でブラインドを上げて座っている搭乗客であつたりしなければ機内では空も雲もよく見えない。しかし、たとえ通路側の席でもこの広告が意

図するメッセージは理解可能であり、物理的に雲が目視できるかは問われていない。

プレイター＝ピニーによれば「雲を愛でる会」という愛好家の会もある。「雲を集めるだなんて、ばかばかしい考えだと思うだろうか。あんなにふわふわととらえどころのないものをいったいどうやって集めようというのだ、[...] コインのコレクションのようにいつまでも手元に残るようなものではないし、めずらしい切手のように交換できるものでもないが、雲のコレクションにはうそ偽りない何かがある。私たちをとりかこむ一瞬のはかない世界がそこにある。詩人で思想家のラルフ・ウォルドー・エマソンは書いている。『自然は変化する雲のごとく、絶えず新しく繰り返す』(Pretor-Pinney: 2009, 邦訳 2010: 4-6) と雲の魅力を述べている。確かに存在するが、はかなく、絶え間なく変化し、形があるようであるが手の届かない、物理的な数値ではとらえきれない、いわく言い難い雲の曖昧さが、雲に関わる意味理解をかくも多義にする理由であると言える。

## 5. おわりに

本論文は「雲」という大気中にある物理的対象が、言語表現においてどのように概念化されているかを論じた。この意味理解のメカニズムについて認知主体の視点を手掛かりに分析した。大雨や災害も引き起こす雲だが、青い空に白く浮かぶ頭上の存在は曖昧な性質ゆえに魅せられる対象でもある。認知主体の上中下の空間認知に根ざした意味理解だけでなく、雲の多様な物理的特徴が言語表現における意味理解に影響することも指摘した。

### 【参考文献】

- 筆保弘徳 (監修・著)・岩槻秀明・今井明子. (著) (2014) 『気象の図鑑』 東京: 技術評論社
- 岩槻秀明. (2005) 『雲の大研究』 東京: PHP 研究所.
- 岩槻秀明. (2008) 『気象学のキホンがよ〜くわかる本』 東京: 秀和システム.
- 小林宏之. (2016) 『航空安全とパイロットの危機管理』 東京: 成山堂書店.
- 倉嶋 厚. (監修) (2016) 『風と雲のことは辞典』 東京: 講談社.
- 新田 尚. (2002) 『雲のかたちで天気わかる』 東京: 大日本図書.
- 坂井優基. (2009) 『機長の判断力』 東京: 講談社+α 文庫. (『パイロットが空から学んだ一番大切なこと』 (2005) を文庫収録に際し改題、加筆、改筆)
- 杉江 弘. (2015) 『空のプロの仕事術—チームで守る航空の安全』 東京: 交通新聞社
- 武田康男. (2011) 『雲と暮らす。雲と出会い、雲を愛でる』 東京: 誠文堂新光社
- 武田康男. (監修・写真) (2014) 『雲のすべてがわかる本』 東京: 成美堂出版.
- 塚本治弘. (監修・写真) (1970, 2005) 『雲と天気』 東京: あかね書房.
- 松浦 光. (2017) 『現代日本語における気象現象の概念化—概念メタファー理論によるアプローチ—』 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士学位論文.
- 森田正光. (2009) 『雲の不思議がわかる本』 東京: 誠文堂新光社.
- 村井昭夫・鶴山義晃. (文と写真) (2011) 『雲のカタログ—空がわかる全種分類図鑑』 東京: 草思社
- 村井昭夫. (文と写真) (2013) 『雲のかたち—立体的観察図鑑』 東京: 草思社
- 村上耕一・斎藤貞雄. (共著) (1997, 2006) 『機長のマネジメント』 東京: 産業能率大学出版部
- 村山貢司. (2007) 『降水確率 50%は五分五分か—天気予報を正しく理解するために』 京都: 化学同人.
- 戸谷高明. (1960) 「古代文学における景物について—万葉の「雲」を中心に—」 『国文学研究』 22, 早稲

田大学国文学会.

山田圭一. (写真・解説) 菊池勝弘 (監修・総説). (2006) 『雲の世界』、東京：成山堂書店.

山梨正明. (2000) 『認知言語学原理』、東京：くろしお出版.

Aisenman A. Ravid (1999) "Structure-Mapping and the Simile -- Metaphor Preference," *Journal Metaphor and Symbol*, Volume 14, 1999 - Issue 1, 45-51, published online: 17 Nov 2009

Cruse, Alan. D. (1980) "Antonyms and Gradable Complementaries." In D. Kastovsky ed., *Perspektiven der Lexikalischen Semantik*, 14-25. Bonn: Bouvier Verlag.

Horn, Laurence, R. (2005) "An Un- paper for the unsyntactician," in *Polymorphous Linguistics Jim McCawley's Legacy*, Salikoko S. Mufwene, Elaine J. Francis, and Rebecca S. Wheeler (eds.), A Bradford Book, Cambridge, Massachusetts, The MIT Press.

Kövesces, Zoltan. (2005) *Metaphor in Culture: Universality and Variation*. Cambridge University Press.

Lakoff, George. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Pretor-Pinney, Gavin. (2009) *The Cloud Colletcor's Handbook*. London: Hodder and Stroughton Limited. (ギャヴィン・プレイター＝ピニー「『雲』のコレクターズ・ガイド」(2010) (訳) 桃井緑美子、東京：河出書房新社

Pretor-Pinney, Gavin. (2006) *The Cloud Colletcor's Guide* London: Conville & Walsh Limited. (ギャヴィン・プレイター＝ピニー「『雲』の楽しみ方」(2007) (訳) 桃井緑美子、東京：河出書房新社

Ross, John. R. (1972) "The Category Squish: Endstation Hauptwort." In P.M. Peranteau, J.N. Levi, and G. C. Phares eds., *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 316-328.

Steen, Gerard (1999) "Analyzing Metaphor in Literature: With Examples from William Wordsworth's 'I Wandered Lonely as a Cloud,'" *Poetics Today*, Volume 20, Number 3, Fall 1999, Duke University Press, 499-522.

#### 【コーパス・辞書】

Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, 3rd edition. 2001. London: HarperCollins. [CEDAL3]

Longman Dictionary of Contemporary English. 2008. Harlow: Pearson Education Limited. [LDOCE]

『新英和大辞典』(第6版) 2002、竹林 茂 [編集代表]、研究社

『英語語源辞典』1997、寺澤芳雄 [編集主幹]、研究社

『英語語義語源辞典』2004、小島義郎、岸曉、増田秀夫、高野嘉明 [編]、三省堂

『デジタル大辞泉』(2015) 松村 明 [監修]、池上秋彦・金田 弘・杉崎一雄・鈴木丹士郎・中嶋 尚・林 巨樹・飛田良文 [編集委員]、小学館

(2018年1月9日受理)

英語	フランス語	ポルトガル語	ロシア語	アラビア語
<物理的状況> 空に雲が浮かんでいる	Il y a un nuage dans le ciel.	Há uma nuvem no céu.	На небе есть облако.	هناك سحابة في السماء
<将来的見通し> [雲っている] 暗雲立ち込める前途	<i>avenir nuageux</i> <i>bonheur sans nuages</i>	cenário nebuloso	облачный прогноз	النظر السحابية (詩的)
<将来的見通し> 暗雲立ち込める前途	jeter une ombre sur (影: 疑い)をかける nuageではなく	lançar umas sombras (影: 疑いをかける) nuvemではなく	×	×
<量:モノ> [雲がある] もうもうたる砂ぼこり	un nuage de poussière	uma nuvem de poeira	облако пыли	سحابة من الغبار
<量:昆虫> [雲がある] 無数のハエ	<i>un nuage de criquets</i> イナゴ	uma nuvem de moscas uma nuvem de gafanhotos イナゴ	облако пчел 蜂	×
<量:人> [雲がある] 多くの証人	×	×	×	×
<心理的状況> [雲がある] 嫌な予感	J'ai accompli mon objectif, mais il y a des nuages à l'horizon.	Eu realizei meu objetivo, mas ainda há nuvens no horizonte.	×	لقد أنجزت هدفي، ولكن هناك غيوم في الأفق (詩的)
<心理的状況> [雲がある] 浮かぬ顔	son visage s'assombrit なら良い	×	×	×
<心理的状況> [雲がある] 悲しい	×	uma nuvem de tristeza	×	×
<心理的状況> [雲の下] 塞ぎ込んでいる	Il y a un nuage au-dessus de sa tête. (頭の上に雲がある)なら自然。「雲の下」とは言わない	Ele esteve sob uma nuvem (nuvem negro [黒い雲]が自然) toda a semana e não sabemos o que está errado.	×	×
<知的状況> [雲の中] ボーっとしている	avoir la tête dans les nuages/ dans la lune Il est dans les nuages.	Ele está vivendo com a sua cabeça nas nuvens.	「雲の中」ではなく « в небесах »なら良い (in the sky/heavenの意)	×
<心理的状況> [雲の上] 幸せな	Il est sur un petit nuage. [petit] があつた方が自然 ○ être au 7ème ciel という表現もある (「第7天国にいる」being on the seventh skyの意)	Ele está nas nuvens.	○ на седьмом небе от счастья なら良い (on the seventh sky of happinessの意) 「雲の上」では表現しない	○ 「雲の上の」という表現で「身分が高い」意なら良い (「幸せな」ではない)

&lt;表1&gt;雲の関連表現と諸言語比較